



多賀大社の節分祭では、遅暦の人たちが赤い頭巾をかぶって豆をまく。豆をまいと鬼を追い出す習は、中国から伝わったもの。「追越」とか「鬼遣」ともいった。

ボリボリとおいしい節分の豆

節分の日に各地のお寺や神社で行われる豆まきでは、小袋に入った豆が放られる（長浜八幡宮の豆袋には5円玉が入っている）。この豆まき用の豆を長浜八幡宮や多賀大社に納めているのは、長浜市三ツ矢町の青山ピーナツ。戦後創業し、現在は青山健二郎さん（40歳）が跡を継いでいる。手作業で煎っていた時代から、今はスイッチ一つでの機械作業になったが、いつまでもおいしい秘伝の技があるとか……

ることが多く、一定していなかつた。その理由を説明し出すと、わけがわからなくなるので、ここではパス。とにかく一年を四等分したもののが「季」で、十二等分したのが「節」。その季節の始まりが立春である。だから「春立つ」というのは、本来正月を意味する。

節分の行事の中には、正月行事が受け継がれたものもあつたりして、なかなか複雑な民俗行事なのだが、豆をまくというのは湖北もいっしょ。普段はむづかしい顔をしているおとつあんも、「鬼は外、福は内」と言いながら豆をまいりする。豆まきというのは、なぜかユーモラスで、童心に帰つたような微笑しさを感じさせる。

そういうことは、意味で、人の人生が一巡していることでもある。年男の赤頭巾ちゃんたちは、とてもカワユイのである。

豆をまく風習は、室町時代のこと

ろに中国から伝わったといわれて

いる。最初は宮中の行事だったが、

時代が下つて庶民にも定着してい

つたようだ。

では、なぜ豆をまくのかというと、穀物には、解毒、魔よけの呪力があるとされたからである。しかも、大豆は摺りつぶして、できものに塗つたり、煮汁にしたり煎つたりして胃腸薬や解毒薬とされてきた。豆をまいて悪霊を追い払おうというわけである。

幼いころ、「また豆をひろて、歳の数だけ食べるとマメにならんやで」と教えられた人も多いだろう。歳よりひとつ多く食べるといふと、立春からの一年に福が来ると



どこに来る…

立春とは言つても 湖北は冬の最中

「春夏秋冬、どの季節がいちばん好き？」と尋ねられたら、あなたはいつを選ぶだろう。「やっぱり春やね」と言う人が半分、「秋がええな」と言う人が四分の二、そして残りの四分の一が夏と冬。アンケートを取つたら、そんなあたりに落ちつきそうだ。なぜ春がいちばんなのか。説明はいらない。

春は待遠しい季節なのである。湖北に住む人たちにとって、春は想像気持ちはひとしおである。厳しい冬から、生きとし生けるものが生まれ出る喜びの春へ。暮らしや仕事が天候に左右されたころは、いつそう春の予兆に敏感だったに違いない。だから、湖北には

春を待つ行事が多い。

春はいつごろやってくるのか。

暦のうえでは立春だ。でも「立春」とは言いながら寒さきびしき折から……などと手紙に書いたりす

る。湖北は、まだ冬の最中である。

立春の前日は季節の分かれ日、つまり節分である。季節には春夏秋冬の四季があるから、立春だけではなく、立夏、立秋、立冬の前日も節分である。でも、いまでは立

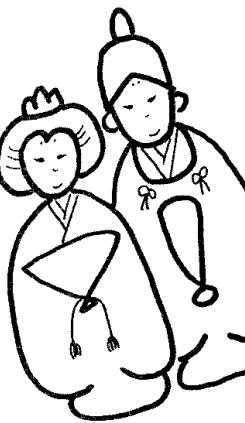
春の前日だけを節分と言つて、

年の節日と考えるようになつた。

それだけ、春を待つ気持ちが強いからだろう。

年男が赤頭巾被つて 福餅福豆まき

節分は、現在の暦では一月三日だが、旧暦では正月一日前後にな



試一品
七本鎌つみれ味
清酒
七本鎌
シチキンキヤリ
滋賀県伊香郡木之本1107
富田酒造有限公司
TEL・0749(82)2013
FAX・0749(82)5507

早春の花

(アセビ森林公园のコブシ)



(高時川のマンサク)

マンサクは、春まだ遠い冬枯れの木に花をつける。寒さに抗して、黄色い小さな花が枝いっぽいに咲く。

高時川の川原や堤防には、さまざまな樹木が自生している。マンサクもそのひとつだ。万花に先がけて、まず咲くからとか、豊年満作のように黄色い花が満ち満ちるからとか、名の由来はさまざま。

まるでラーメンの麺のように細長く、縮れている。愉快な花だ。

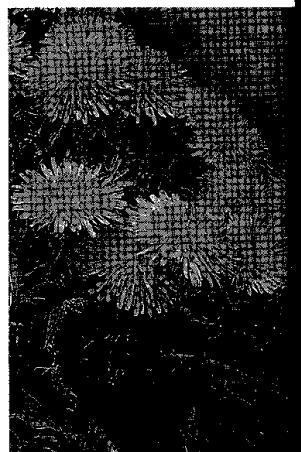


(今津のザゼンソウ)

ザゼンソウは英名をスカンクキヤベジという。キヤベジはキヤベツのこと。形が何となく似ている。じゃ、スカンクは？ そう、ザゼンソウの花にはとてもいや臭いがあるのだ。花は赤い苞の中にあって、大きなチョコボールに黄色いイップソブがついたようなもので、座禅を組む達磨大師に見立てて名がついたという。

湖西の今津町弘川にある県内最大の群生地は、特定群落に指定され住民らに守られている。湖北では、余呉町の北端の集落・中河内で見られる。

春遅くまで残る雪の中に、その周りだけ雪を解かし、苞が首をもたげるザゼンソウは、開花期が短く、花が開くとすぐ葉も開く。



(路地のタンポポ)

春には黄色い花がたくさん咲く。大地の底に蓄えられていた太陽のエネルギーに彩られたような花びら。タンポポもそんな一つだ。

タンポポは茎を長く伸ばさず、葉を地面の上に広げて日光を取り込んでいるので、田んぼの畦や道端など、日当たりのよい場所に咲く。

このごろ、秋や冬でもタンポポの花を見かけることが多くなった。それは、明治以降、日本に渡ってきた帰化種のものだ。

タンポポは、日本全体で20数種類あるが、滋賀県では7種類が見られる。そのうち在来種は、カンサイタンポポ、ヒロハタンポポ、ケンサキタンポポ、セイタカタンポポ、シロバナタンポポで、帰化種は、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ。

在来種と帰化種の見分け方は、まず外縁苞片がめくれているかどうか（めくれているのが外来種）。帰化種の種子は在来種より小さいけれど数が多く、1年中休眠しないで増えてきたわけだが、在来の植物が生えている場所にまで侵入することはない。新興住宅地など、工事をして新たに裸地になった場所で、どんどん広がっている。

車で手軽に眺望が楽しめる。
アセビ森林公园という名だが、春先にはコブシの花が目につく。冬枯れの色のなかに、純白の花が咲いている。木々の葉が繁る前だから、白い花がいつそう鮮やかだ。

レインボウ 3300円・4200円
さきやき 3300円・4200円
海鮮なべ 3500円~
チキンナゲット 3500円~
和風会席 3500円~

会社の歓送迎会・婦人会・ご家族など和室をご利用ください。

・大広間50~60人可・小和室4室
・送迎バス有

レストラン **びわ**

びわ町曾根国道沿
TEL. (0749) 72-3655(代)